

和歌数十首：文苑

著者	宇衛，園，哲雄，義春，不老庵，巴城子，杉山，富槌
雑誌名	龍南會雜誌
巻	28
ページ	57 - 59
発行年	1894-06-27
URL	http://hdl.handle.net/2298/4423

澄江十里水悠悠。一片輕舟漁唱幽。綠樹蒼蒼連荻落。白鷗點點掠芦洲。西山烟鎖落霞遠。天外雲晴夕陽流。師弟同斟垂柳畔。紅塵洗盡倚高樓。

さつきの廿六日、たのか學校の人々、五松庵といふ家につとひしけり、その日、又か友ある永井の君も、同玄くそのむしろにつらかりて、酒のみかはしけるに、うのあくる朝、おのれいさゝか、尋ぬへきことありて、訪ひけるよ、今しがた、俄にミまかり給ひぬとて、妻ある人の泣きしつみける、こはろもいかに、と問へど、たゞ絶えもいらんはかりにさむなきける、人の死ぬる、誰にか悲しうらざらめやは、しかはあれど、をみあわらはの十、一二歳あるを、はしめて、三人のをさ

あ子をわきて、この世をはやうせる、その悲しさ、たとしへあらんや、さるほどに、例のわざともせんとて、あまたしく、人のものするに、妻ある人の、父うへの顔みるも、なふ限あり、よく見てあどて、をさあ子の手をひきつゝ、なきからにとりすがりけるも、をさあ子のあどなき、あにらえらん、只ほゝえみて、人のうちよるをよるこび顔ある、あはれや、終のわかれども、しらぬことよ、どまたあきふせる、目もあてられず、涙とともになにかみいつるまゝをかきて、靈前に手向ける、

宇 衛

たゞく、にみのりえものをちゝの木のかれゆく末をけふいかにせん、さつきやみものゝあやめもわかぬまで、うきくらしけりわかれつらしも

廿八日の夕かた、白川の上川原といふ所にて、火葬にまけるを送りゆきて、歸さに、煙のたちのほりけるをみて、目をねほひながらよめる、
うつゝにもゆめにもたれか白川の

むなしらふりの

きえんはかりろ跡もどめなく
又の日、どぎにゆきて、ありし世の物
かたりともして、なけきけるをり、螢
のとひゆくをみて、

雲をまてあかるはたるの人からは
いつこへまて君問はましを

花 助教授 園 哲雄

あはさりにいかてか見ましみよしのゝ
ミかと守りし花の色香を
しきしまのやまと心をみかきてる

櫻の花は見るへろりける

螢 親友會員 義 春

吹うせにまひく柳の枝こどに

こほれぬ露は螢かりけり

名所郭公

打よする浪のまきまき聞ゆあり

聲高砂にあくほとゝきす

蓮

さらてたに夕すゝまき池の面の

はちすの露にかせわたるなり

氷室

氷室山秋やまたきにかよふらむ

吹音すゝしみねの松風

親しき友にわくるとてよめる

へたてまくにほふ櫻の心もて

ともにみかこん敷嶋の道

白川の水の潤をたるに人のゆきゝ

するをきて 不老庵

白川のみかさをあさみわか子らか

袖うちはへてかちわたる見ゆ

水あせてさわたる人の多かれや

花むらさきにかゝる藤波

橋もり今は影も見ゆなく

夕雲雀 視友會員 杉山 富樫

五家の莊よて 巴城子

ほのくらく霞む春野の夕ひはり

深山なるふるすもとめて鶯の

姿はまほす聲の落くる

さへつる谷そ今も春ある

雲よけてあかる雲雀も今はとて

松上藤

床のすこれに落る夕くれ

庭のれもの松の縁もわりぬまで

批評

●『英佛兩國の革命』 英國の革命と佛國の革命とは、著く類似せる點あると共に、又著き差違せる點ありて、其異同を研究するとは甚だ興味あるとなり。此興味ある問題は、前號に於て、十時君の彩華ある筆によりて記述せられぬ。嘗て君の演説を聽しに、議論口を衝て出て來り、澁滞の風なく、宛ら急濤の斷崖を奔下するが如し。今君の文章を見るに、頗る趣を企ふす、既に此手腕あり、乾燥無味に傾き易き問題をも、尙ほ趣味溢々たるものあらしむるに足る、讀み去り讀み來りて毫も辛苦を感じざる、故なきにあらざるなり。君の長所實に此にあると共に、君の短所も亦此に存す。殊に歴史の事實を記述せらるゝ時に於て、此短所を云へべきもの明なるを覺ゆ。即ち歴史の議論に於て、考証狭きに失し、判斷擅なり易きと是なり。

英佛兩國の革命の遲速を論じて、其原因を兩國文明の差違に歸せるは、余敢て異論なし。然れども此重大なる事實を論ずるに當り、史家の一二の語を引照して足れりとなし、致て他に原因を探究せず、又『自由探究の精神はヴォルテール、ルソウの以前、既に英國に於て其花を開きぬ』と論斷して、其事實を示さざるが如き、餘に簡單に過る感なからざらんや。

君は革命の特別なる原因に就て曰ふ、『然れども之を企つるは響る迂なるに近し、人世進歩の大勢豈特別なる一二原因の左右する所ならんや』と、而て君は終に此特別なる原因に餘に重を置れざりしが如し、後段僅に之を略記せるに過す。此事單に革命を論ずるに當り